

令和2年11月

語り部：大西 郁

昭和20年7月26日、夜半11時頃、松山市は、アメリカ軍のB29戦闘機の襲撃を受けました。私が、小学校6年生のときです。住んでいたのは、今の千舟町で市駅の近くです。私は、母を早くに亡くしていたので、父の姉（伯母）に引き取られていました。伯母夫婦は明治生まれなので、祖父母の年齢と同じくらいで、従姉になる娘夫婦が両親、私は孫のような関係でした。

空襲の時の家族構成は、伯父が元気でしたが、伯母は7年前に脳溢血で倒れて以来、寝たきりの病人でした。私の母親代わりの姉さんと呼んでいた人は、生後1年の子どもを抱え、父親代わりの兄さんと呼んでいた人は、軍人で高知県に配属されていました。近くの下駄屋さんが町内会長で、非常時の手配は相談してありました。身動きのできない病人は、会長さんの店先に立て掛けてあるリヤカーを使っていいと言ってくれていました。姉さんと二人で病人を道路まで運ぶことは可能でした。

空襲警報のサイレンで、いよいよの時だなと胸がドキドキします。伯父さんは平素から打ち合わせていたように、親戚の人に避難を頼み、私はすぐ近くの会長さんの店先へ。そこで見た光景を忘れる事ができません。会長さんのご夫婦がたくさんの荷物をリヤカーに積み上げて出発しようとしていました。伯母さんを助けるため、家に駆け込もうとした私は、子どもを負った姉さんに、体当たりする勢いで止められました。火の手が近くなっています。恐怖で金縛りになり、「おばさん、ごめん！」泣きながら逃げました。「おばさんを見殺しにした！」「見殺しにした！」3歳から、孫以上にかわいがられて、病床からでも、いろいろと心配してもらいました。学校から帰ったら、なるべく病室で、手足のマッサージをして、おしゃべりをして、看護婦さんまで動員されて来てもらえなくなっていたので、小学校5年のころからは食事の介助、下の世話までしていました。母親以上に強く結ばれていた人と、このような惨い別れ方をすることになりました。

久米の知人の家で、一休みして、27日の朝、丸焼けになった家の様子を見るために姉さんと、とぼとぼと歩いていたら、市内の戦果の偵察なのか、1機の飛行機が低空で飛んでいました。ぼんやりと見上げていたら、アメリカ兵の姿が見えるくらいに低く、近くなったと思った途端に、機銃掃射の弾丸が1メートルくらい近くで、稲妻のように土埃を上げて、一瞬にして走り過ぎました。ぼんやりと立ち止まっていましたが、痛くないのに左腕の後ろから、血が流れて指先からポタポタと落ちました。なにがどうなったのか理解できませんでした。ちょうどすぐ近くのお寺に、20人ばかりの兵隊さんが駐屯されていて、異変に気付き、手当をしてもらえました。弾の破片が飛び散って刺さっていたそうです。破片を取り除き、麻酔もなく縫ったので、気分が悪くなり、松山まで歩くのは無理だからと、姉さん一人で行きました。夕方、遺骨は白い木綿の手ぬぐいに包まれて、私の手のひらにそっと置かれました。まだ暖かく、柔らかいような気さえしました。泣き続ける私に、姉さんは言いました。

「そのままの姿だったから、煙で意識が亡くなり、焼ける時は痛みを感じる状態ではなかったと思うよ。それを見せたくなかったから、その事故も、伯母さんの強い意志が通じたのよ。見せたくなかったのよ。」

今となって思うのが、象の脚に蟻が噛みつくような、無茶な戦争に突き進み、両方に莫大な被害をもたらした原因はなにだったのでしょうか。世界を知らない、日本を知らない、平和の尊さを知らない、そんな一般庶民はこの戦争に間違いはないと簡単に思っていました。広島、長崎、沖縄、そして知覧、すべて大昔のことではないのです。今は、世界の情勢が、簡単に把握できる時代になっています。先の見えない紛争がたくさん続いています。貴方たちが日本の将来を形成する人たちです。平和な日本であり続け、紛争のない世界になりますように。